

二人の母が繋いでくれた法縁。

鈴鹿教会 上田侑慧さん

上田侑慧さんは、幼いときに実母を亡くし、父親の再婚で、継母との生活が始まった。しかし、継母からつらく当たられた上田さんは、中学卒業後、家を出て定時制高校に通いながら就職。その後、仏教の教えに出会い、精進を重ねていく。仏教の仲間からは、「継母の言葉尻にとらわれず、思いを受けとめられるように」と諭されたが、継母との葛藤は、しこりとなって心の底に溜まったままだった。平成29年のこと、継母が末期の肺がんで余命三ヵ月と知らされる。「どんな顔をして会えば…」と悩みながらも実家に向かうと、「来てくれたんや」と病みやつれた継母が笑顔で迎えてくれた。仲間からの言葉を胸に継母に寄り添う看護。「ありがとう」を口にするると、「ありがとう」が返ってくる。そんなかけあいをとおして心が通っていく喜び。実母が身命を賭して信仰の道を示してくれ、継母とのつらい過去は仏さまの慈悲と思えるいま、二人の母との縁に日々感謝している。



日常を当たり前に生きる——精進①

私はよく、「精進しじゆん、精進、死ぬまで精進、生まれ変わつたらまた精進」とお話しします。人として「完成する」ということはないのだから、進歩・向上をめざこころみす志を忘れないようにと、この言葉をおして自らを戒いましめているのです。ただ、精進の意味するところがわからないままこれだけを聞くと、精進するには相当の覚悟かくごが必要と感じ、「自分にはできない」と尻しつごみする人がいるかもしれません。

道元どうげん禅師は、精進を「人のためになるもろもろの善よいことを、心をこめて行ない、休むことがない」といつていますが、休むことがないというのはまた、つらそうです。

そこで思いだすのは、「当たり前のことを当たり前にできる人間になってほしい」という本会の開祖・庭野日敬の言葉です。在家ざいけの私たちにとって、それは休むことなくつづく日常を、いつでも、どこでも「即是道場そくぜどうじやう」の姿勢ですぐすことです。だとすれば、精進とは、がむしゃらに打ちこむ修行というより、むしろ日常生活のなかで人を思いやり、まわりの人に安らぎを与える言葉や行動を心がけること、つまり信仰者として当たり前の毎日を送ることにほかなりません。

立正佼成会